

Title	岡田純一著 経済学における人間像
Sub Title	
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.358(88)- 359(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19640401-0088
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ところで第一章では今日イギリス鉄工業の中心地であるバークミンガムが一六世紀には小市場にすぎず、その市場圏はせいぜい半径二〇マイル程度のものであり、この内部でバークミンガムの皮革、金属工業中心に再生産圏が形成されていたことが指摘される。このいわゆる局地的市場圏は、その後一七世紀には地域的市場圏に拡大してくる。そしてロンドンの特権的製鉄業者や商人と公然と抗争するまでになる。さらに一八世紀前半にはバークミンガム地域が全国の鉄製品市場の中心になり、産業革命の前提条件が成熟してくる。第二章ではこのような全国市場の形成を道路交通の面から傍証しようとしたもので、一八世紀前にイギリスでよくきかれた悪道路の問題は、結局全国市場の成立と関係して盛んになった地方間の輸送によるのではないかとし、道路修理請願書によってこの想定を裏証する。第三章ではかくして直接間接に立証された鉄製品イギリス国内市場の形成が、価格法則に与えた影響を分析し、バークミンガム近くのセヴァーン河に面した港町ビュウドリの相場が、全国的価格の基準とされていることを確かめる。そしてビュウドリ相場の計算を分析し、利潤範疇の把握が弱いことを指摘しつつも、平均価格形成の経済史的意義を強調する。

第四章ではこのようなバークミンガム地域の個別分業の展開が、独立小生産者の上向的發展の結果として、異種の部門を夫々分業に基づく協業(マニユファクチュア)として経営し、これを統合しているものや、これらの部門を相互に結合させているマニユなどがあらわれてくるのが分析される。第五章では大規模製鉄所の経営者が、零細金属加工業者であることに注目し、そこから元来の製鉄業者の製鉄所賃貸制の存在をつきとめる。そしてここに零細加工業者の上昇可能性を見出す。さらに従来の鉄工業が武器等の需要にたえて生産を行っていたのに対し、バークミンガムでは安価な日用品金具の需要にたえて急速な成長をとげた。そして零細資本しかもたぬ経営者は共同出資者をパートナーシップの形で求めたのである。

さて最後の第六章では製鉄工業と鉄加工工業の間に利害の対立がみられつつも、一八世紀前半には鉄加工業者が上昇して大製鉄業者となつて行く社会的対流現象の故に、一七五〇年の鉄条令は製鉄業の保護政策が貫徹するとみる。すなわち鉄工業においては従来の鉄加工業そのものの発展ではなく、この部門から上昇した人々が製鉄業の近代化をはかることにより、新しい技術による機械製造業を展開

するが、なぜそれが客観科学としての経済学を成立させたかという方法的問題は、十分に説明されないように思われるし、マルクスに關しては「資本論」の中にかれの人間観をよみとらうとする著者の苦心にもかわらず、その苦心は時に「資本の論理」そのものの叙述にひきずられ、結局、経済学のとを人間像が空しく追いかけていくようにみえる。

させたのであり、これがイギリス産業革命の一方の基軸となつたのである。以上の分析は、すでにのべた理論的仮説を豊富な実証の内に検証しているものとして高く評価される。ただ著者もいふように今後の研究において国内市場の形成過程と個別分業の展開過程の相関関係が、特に労働力の商品化と関連して、究明されることを期待したい。(岩波・A5・二二七頁・八〇〇円) 寺尾 誠一

岡田純一著
『経済学における人間像』
「経済学における人間像」という標題は、理論と思想、論理と主体としての人間のあり方の関係について興味をもつものにとつてきわめて魅力的である。本書はこの広大な問題に対して通史的にすっきり答えてしまおうというものではなく、むしろ特殊研究らしく、重点的に探求している。

本書は三つの部分から成っている。その一は、スミス経済学における人間の問題、その二はマルクス経済学における人間の問題、その三はシスモンディ経済学研究(特に人間の

問題ではない)である。

スミスにおいてはその「道徳情操論」の中に、マルクスにあつては「ドイツ・イデオロギー」の中に、それぞれの根本的な人間観・人間像が追求され、それらが「諸国民の富」「資本論」の中でいかに経済学として結実していくかが問題とされる。シスモンディについてはその「経済学新原理」と「経済学研究」がとり上げられる。

著者は序説の中で、経済学において人間の問題がとりあげられるのは二つの意味においてであるということを描している。その第一は方法論の問題としてであり、第二はヴィジョンとしてどんな人間像がえがかれているか、ということである。この指摘はまったく正しいが、実際にはこの二つの意味を正確に把握しながら人間像の問題を追求することはきわめて困難であつて、方法論の問題は方法論一般の問題となつてしまひ、またヴィジョンの問題は方法的関連ぬきのヴィジョン一般になりやすい。本書も著者の問題意識の正確さにもかかわらず、時に必ずしも「人間像」として描いていないかと思われ

る部分がある。スミスについては「道徳情操論」で設定された抽象的平均人が「諸国民の富」の根底にある経済人に一致することは判

るが、なぜそれが客観科学としての経済学を成立させたかという方法的問題は、十分に説明されないように思われるし、マルクスに關しては「資本論」の中にかれの人間観をよみとらうとする著者の苦心にもかわらず、その苦心は時に「資本の論理」そのものの叙述にひきずられ、結局、経済学のとを人間像が空しく追いかけていくようにみえる。

このような結果の根本的な理由は何かといへば、「人間像」という問題は、マックス・ウェーバーのエートスの分析におけるような広い歴史的、社会的展望に支えられる必要があるのであつて、本書がスミス内在的であるがゆえに、かえつて、広い思想的視角を設定しなかつたからではなからうか。さらにいえば、経済学の中に人間像の足跡を追い求めるよりは、逆に時代の人間像がいかに、またなぜ、経済学に結実するかをみる視角が必要なのではなからうか。

その点からも本書はシスモンディのロマン派経済学者としての面だけでなく、その経済学への積極的貢献を強調したさいごの部分、フランスでのマルクス研究の紹介の部分が、むしろ著者の面目を発揮しているようである。(未來社・一九六四年一月刊・A5・二四二頁・七八〇円) 野地 洋行

土屋六郎著

『国際金融の構造と理論』

国際金融問題に関するテキストないし研究書が、最近相次いで出版されるようになってきている。その直接的契機をなしたのは、日本のIMF八条国への移行、ドル不足からドル危機への転換に伴うIMFの改革・新しい国際通貨機構の設立をめぐる問題等であることとはいう迄もない。しかしより本質的にいへば、世界経済のスミスな発展・運行のためには、実物的接近のみでなく、貨幣金融的接近が必要であり、それに応じた適切な国際金融メカニズムが確立されねばならないという理解がなされ始めたことに求められるであろう。

本書もまた、かかる要請に応じて執筆されており、序文において明確化されているように、前著の『経済成長と国際収支』での国際収支問題の実物経済的分析を、貨幣金融的分析によって補足ないし深化しようとする意図が存在している。

その性格は、研究書としてよりも、むしろ標準的な国際金融の教科書としての面が強く、実務・理論・制度・歴史を要領よくまと